長沼温泉「ぽっぽの湯」奮闘記①　　板垣久喜（長沼上新田）

長沼温泉の再開発、命名

民報藤島2018年02月25日第1140号

長沼温泉「ぽっぽの湯」オープンから18年経過し、「昔話」になるかもしれませんが、民報藤島編集部からの依頼があり、断片的になりますが、温泉事業に取り組んだ記録を綴ってみたいと思います。

再開発推進委員会からオープンまで

オープンまでの経過を振り返れば、

平成４年12月、長沼地区部落３役会議で、地域活性化のために先細り状態の温泉の再開発を町に働きかけることを決定した。

平成５年７月、温泉再開発利用研究委員会が発足。

平成６年、委員会による構想を策定。

平成７年、「ふじの里づくり計画」に、「長沼温泉再開発計画」として取り上げられ、組織も「長沼温泉再開発推進委員会」として整備された。

平成９年、施設整備事業費が予算化され源泉掘削始まる。

平成10年１月、長沼２号源泉の掘削終了。自噴する。

平成10年、第３セクター設立準備会発足。

平成11年７月、ふじの里振興株式会社設立。

平成12年４月19日午後２時（ヨイクニ)、オープン。

「ぽっぽの湯」の命名

平成10年に新温泉の愛称募集を行い、「ぽっぽの湯」に決定した。

命名者は長沼十文字の奥泉伊知雄さん。

長沼のシンボルである白鳩の「ぽっぽ」、

子ども達から口ずさめる汽車ぽっぽ、鳩ぽっぽの「ぽっぽ」、

泉質が良く、あったまることからの「ぽっぽ」、などから選ばれた。

後に「ぽっぽの湯」のフロントにも飾ってある文字入り鍛金(たんきん)額を奥泉氏に贈呈し、自宅茶の間に飾られている。

制作者は中荒俣の小関鉄雄氏で寄贈いただいた。

フロントに飾られている鍛金額

長沼温泉「ぽっぽの湯」奮闘記②

電話番号ヨイフロ

民報藤島2018年03月04日第1141号

オープンに向けてと電話番号

平成11年３月末でＪＡ庄内たがわを早期退職し、７月から町役場２階企画課内に机一

つ頂いて、準備室勤務となった。
しかし、私自身の屋敷の片付けなどで忙しく、何も分からず不安の毎日。ちょうどその頃、駅前のｋ社長から「今ならヒマだろうから北海道ドライブどうだ」と誘ってくれ、６月19日から８日間、フェリー２泊、宿２泊の他はキャンプ場巡りで自由気ままな４人旅となった。
走行距離２６４１㎞。しっかり気分転換できた。
最初に思いつき手掛けたのが電話帳調べ。藤島に４１２６があるか調べた。幸い無かったので企画課長にお願いし、４１２６（ヨイフロ）の電話番号をとってもらった。これが初仕事であったように思う。

工程会議への出席

平成11年７月26日に正式採用されて、毎週の工程会議に出席することになった。
設計者や施工業者との打合せは、最初はちんぷんかんぷんで何も当を得ない状態が続く。
何ヶ月か過ぎる頃にようやくのみ込めて、素人なりに希望を申し上げたが叶わないことが多く、当然のことと思い知った。
ここでは与えられた施設で、やれるだけやるしかないということ、第３セクター「ふじの里振興株式会社」として赤字を出さないようにするしかないと、少し気持ちがゆっくりした感じであった。
いざオープンしてからも、使い勝手の悪いところなど、町にお願いし、早期に改善改修して頂いたことに感謝したい。

社員採用

平成11年11月に会社の社員採用試験を実施した。
まだ実績もない会社に果たして、という心配もあったが、幸いにも倍以上の応募があった。
しかも優秀な人ばかりで、人選に困る状態の中、一次採用13名、平均年齢30歳（私51歳を入れても）と若かった。
しかも経験者はゼロであってもやる気を感じた。ありがたかった。
一人ひとりが一所懸命それぞれのポジションで頑張って頂いたことで、体制的にはまあまあスムーズなスタートが切れた。

長沼温泉「ぽっぽの湯」奮闘記③
「ヨイクニ」オープン

民報藤島2018年03月11日第1142号

笑顔と声かけ

社員採用し、３つの部門（総務、施設、食堂）としてそれぞれチーフを置いた。
部門研修や全体研修を行い準備に当たった。
特に食堂部門は、後述するように出遅れた。食器の選択からメニューづくりまで大変

だった。
社員には、最初の心構えとしては、「思いやりが全て！」「笑顔と声かけ」を徹底するように説いた。
社員の努力によってオープンから好評価を頂いたものと思う。

場所について

長沼温泉再開発計画の中では、「何で長沼か」「町民体育館の側など町の中心にすべき」などと多くの意見があったと聞いた。
間もなくオープンという平成12年の藤島町新年会でも、まだそういう意見があったと、藤島公民館長のＴさんから聞いた。
そんなこともあって、長沼温泉「ぽっぽの湯」ではないと、冠は付けるなとの至上命令もあり、やりづらかった。
しかし、ある程度軌道に乗った頃から緩和されたように思う。
また、平成10年頃と思うが、当時の地元Ｓ町議会議員から、建設場所についての情報を受けた。

オープン時のテープカット記念写真は浴室の通路左側に掛けてある

「何でこんな道路端に」「もっと奥まった所であれば、手前にはいろいろな開発ができたのに」と申し上げた。
周辺開発ができればと思ったが、現実には広がりが見られないのが現状で残念に思った。

４月19日午後２時オープン

平成12(２０００)年４月19日にオープンを決定した。
「何で４と９のつく日を選んだのか」と意見があったと聞く。
その年の４月の大安は13日、19日、25日であった。
13日では準備が間に合わず、25日ではゴールデンウィークに近すぎて、これまた問題として19日に。
何とかご理解頂くにはと考え、10時オープンのところを午後２時オープンとした。４１９２（ヨイクニ)の語呂合わせである。

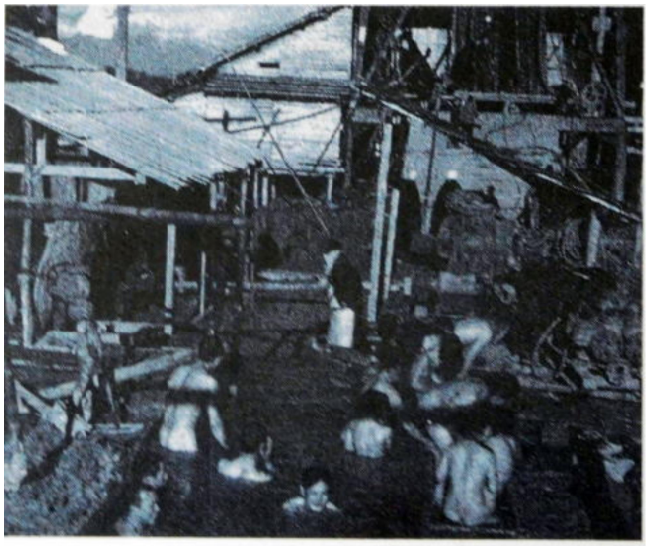
長沼温泉「ぽっぽの湯」奮闘記④
長沼温泉の生いたち

民報藤島2018年03月18日第1143号

「民報藤島１１４０号をみた」と、ＪＡ時代の上司であった大先輩の鈴木重雄さんから激励の電話を頂いた。

再開発以前の長沼温泉も載せたらどうかとのアドバイスがあり、ここで一旦中断して、ぽっぽの湯の前史を紹介したい。

昭和24年10月、帝国石油(株)が石油試掘し、１２００㍍から熱湯と天然ガスが噴出した。



鉄舟浴場湧出当時

帝石では、目的の石油が出ないので廃坑の予定であったが、長沼村では温泉郷の計画をたて、昭和25年３月、２５０万円で帝石から譲り受けた。

温度65℃、無色微弱アルカリ性で、リュウマチ、神経痛に利くというので、温泉運営委員会を設置して開発。

鉄製の湯船と舞鶴海軍兵舎の解体材を使って公衆浴場を建設し、村営長沼温泉休憩所・厚生館の営業を開始した。

戦後の引揚者などが集まり活況を呈し、温泉旅館２軒と共同浴場、飲食店や雑貨屋も十数軒立ち並ぶ、長沼温泉郷ができあがった。

昭和28年４月、旧日赤診療所が、旧映画館を改修して日赤長沼診療所を開設した。

しかし、源泉の深さ１２００㍍と井戸から宿までの距離（４００㍍）から、熱湯が途中で冷めて50℃を下回り、加熱が必要になった。

昭和29年は湯量・ガスとも半減し、旅館にも診療所にも送湯できず、共同浴場のみとなり、１５０万円の予算で再生工事に着手。

昭和30年４月、湯口を広げるガンバーに成功し、湯量が８割復活。

しかし、年々湯量が減少し天然ガスも枯渇し、共同浴場で細々と運営する状態となった。

湯が引けず診療所は31年７月に閉鎖。町は34年４月に助産所を開所したが、病院で出産する人が多く47年廃止。「老人いこいの家」として利用したが、52年12月に町が老人福祉センターを完成したのを機に54年10月廃止した。

昭和24年　帝国石油(株)の試掘でガス・温泉湧出
昭和25年　長沼村が買い取り、公衆浴場を開業
昭和29年　合併藤島町になり、温泉は町営
昭和30年　湯口を広げるガンバー工事
昭和32年　温泉組合を設立し、町から賃貸契約
昭和32年　源泉の浚渫工事施工（１２２５㍍）
昭和36年　公衆浴場の改築

昭和47年　温泉組合解散・温泉商工業協同組合設立
昭和58年　温泉商工業協組を解散し温泉組合再設置
昭和63年　資源開発会社による調査実施
平成６年　温泉再開発利用研究委員会が構想策定
平成７年　ふじの里づくり計画（長沼温泉再開発）
平成10年　長沼２号源泉掘削完了（１５００㍍）

長沼温泉公衆浴場と付近

長沼温泉「ぽっぽの湯」奮闘記⑤
長沼温泉の半世紀

民報藤島2018年03月25日第1144号

長沼温泉「ぽっぽの湯」が開設後７年目で利用者２００万人を達成し、藤島庁舎産業課から広報「ありがとう、ぽっぽの湯２００万人達成」が平成19年２月21日付で発行されている。

同紙に「長沼温泉の半世紀」と題して、長沼温泉振興組合代表の土田利男さんの文が掲載されており、ここに転載させていただきます。

☆　　☆　　☆

戦後昭和24年、焦土と化した国土、全国民が復興に立ち上がろうとしている時、帝国石油の試掘井から石油でなく、お湯が湧出しました。

長沼村が権利の一切を買い取り、温泉運営委員会を設置して、鉄製の湯船と舞鶴海軍兵舎の解体材の使用による公衆浴場を建設し、営業を開始しました。

時が時だけに大繁盛の毎日でした。

昭和29年の合併で藤島町に経営権が移管になりましたが、町は温泉町内会に温泉組合を組織させて、運営を委託しました。

建物の老朽化、湯量の減少、石油ショックなど幾重もの障害で運営は厳しいながら、町の協力を得て何とか運営を継続してまいりました。

平成５年に長沼地区の町内会３役会が地域活性化のため、温泉再開発利用研究委員会を設立して、再開発の構想をまとめて町に提出し、町では諸々の委員会、町議会を経て、温泉の再開発と第３
セクター会社の設立に至り、平成12年に新温泉が誕生しました。

再開発計画では、年間利用者数を15万人と計画しましたが、今般７年で２００万人を達成するという事態で喜ばしい限りです。

長沼温泉組合では、第３セクターによる新施設が稼働する日まで、半世紀にわたり旧公衆浴場を運営し、地域の温泉利用環境を支えてきました。

ぽっぽの湯がオープンするまで、長沼温泉はいろんな面で紆余曲折もありましたが、

現在は多くのお客さんの協力で、好況の様でありがたく思います。

平成の合併により施設所有は鶴岡市に移りましたが、第３セクターの運営を支えながら、新たな目標に向けて頑張っていきたいと思います。（長沼温泉振興組合代表　土田利男）

長沼温泉「ぽっぽの湯」奮闘記⑥
湯量が足りない

民報藤島2018年04月01日第1145号

さて、オープン時に話しを戻しますが、当日は気候が穏やかな最高の晴天で、風もなく、スムースに進められた。

長沼地区の皆さんだけでなく近隣からも多くおいで頂いた。長沼にこんな人集まりは初めて、とも言われた。

後で社長（小鷹栄一町長）からは、「天気だけは板垣に当てられた」とも言われた。

魔の午後８時

好天に恵まれ、順調にスタートしたと思いきや、何と湯量が足りないことが判明し、午後10時までの営業は無理との事になった。

翌日からの６時営業開始も考えれば、緊急的に早く営業を切り上げなければとの判断で、仕方なく午後８時に閉館とし、「魔の８時」を迎えた。

玄関に行ってお詫びをし、駐車場に行って停車する前に「申し訳ないのですが急きょ８時終業です」と伝えた。

「何だと」「せっかく来たのに」「バカヤロウ」と罵声を浴びた。

５日間続けて約１時間半、駐車場に行ってのお詫びに気が滅入った。

その後に対策を採ってもらい、揚湯(ようとう)ポンプの準備やら大変だったのは言うまでも無い。

設計家からも「この湯量の激減については騙(だま)された」とも言われた。

２本の源泉を利用

２号源泉は平成11年１月30日に掘削が終わり待望の温泉が出た。

透明な強塩温泉70・４℃で、しかも毎分４６０㍑ときた。表面に若干の油膜が見られることも判明した。

昭和24年に湧出した１号源泉と泉質がほぼ同じで喜んだ。

ただ、山形県温泉協会Ｙ専務理事からは、泉質が良すぎて溶存物質量が２万を越えることから、入浴事故に注意してとアドバイスを頂いた。

また温泉協会の研修会の宴席では、油臭のある温泉として話題にもなった。

昔から長沼温泉の湯は良いと言われて、実際に多くの皆さんからも高い評価を頂いていたことから安堵した。

２号源泉が高温過ぎることから、極力水道水を使わない策として、３号源泉が掘られた。

３６０㍍掘削し32・２℃の単純温泉が出て、これがまた、ウーロン茶並みの色づきだった。

脱色装置をつけたが透明にはならなかった。

いろいろ組み合わせて苦労しながらの温度管理に努めた。

長沼温泉「ぽっぽの湯」奮闘記⑦
痩せた、やつれた

民報藤島2018年04月08日第1146号

大変な作業の連続

70・４℃の高温で塩分が強く、しかもガス混じりの源泉で、使いこなすのに苦労した。

オープンから何年かはガス発電機も稼働した。

湯量の確保や３号源泉の脱色装置など装置の管理も含め、入浴施設管理者として避けられないレジオネラ対策など非常に気を使い、大変な作業であった。

オープンからの40日間

経験者ゼロからのスタートで研修期間も短く、右往左往することが多く、すべてに気を使った。

朝６時オープン前から夜10時まで気の抜けない日々で、土、日もなく休みなしが続いた。

あれもこれも一つ一つ解決していかなければならないことばかり。当然おのずと全てトップダウンとなり、社員も大変だったと思う。

営業時間中は施設にすぐ戻れる態勢を考え、駐車場の車の中で仮眠を取る日もあった。

お陰で５kg近く痩せた。やつれたとも言われた。後に、気の毒で声をかけられなかったとも聞いた。

丈夫な体(肝臓も！)を頂いた両親に感謝である。

スタッフ全員の懸命な努力で初期を乗り切った。

この時、ナンバーⅡを置くべきとのアドバイスもあり、急きょ６月の取締役会に課長を置く人事案件を提出し了解頂いた。

このことにより幾分楽になってスムースに行くように思えた。

母の死

長く寝たきりの母、いつ逝ってもおかしくない状態が続いていた。

オープン前やオープン間もない時期では、大変な事になると心配が続いた。

７月21日に息を引き取る。ちょうどオープンから約３ヶ月。せがれの仕事に目途が付いた時に！

それまで待ってくれ頑張ってくれたんだと思った。

長沼温泉「ぽっぽの湯」奮闘記⑧
総務と経理、突然の退職

民報藤島2018年04月15日第1147号

ＪＡの経験生きる

幸いＪＡ時代に総務係３年８ヶ月、経理課２年、園芸特産課５年など経験させて頂い

たことで、何とかスタートから経理全般と諸届出などもこなすことが出来た。
平成20年に退職するまで９年間、法人税や消費税申告も自分で出来たこと、ＪＡ時代に多岐に亘る職務を経験させて頂いたことに感謝＜＜である。
平成18年に税務調査の通知があり、我流だったので果たしてどうなるものやらと心配した。
当時、テレビで伊東四朗さんが「スカッとジャパン」と「モヤモヤ」との番組があり、冒頭「まったく我流なのでこの機会にスカッとさせて頂くようご指導願いたい」とお願いした。
幸い大きな問題もなく、３日間の予定が２日で切り上げられた。
以後、ご指導頂いた税務調査官のＳさんには、引き続きご指導願い助けて頂いた。

総務係長の突然の退職

平成18年度末に、総務経理を任せていたＫ総務係長から突然の退職願が出る。家庭の事情とはいえ、ちょっと慌てた。
せっかく全て任せっきりに出来ていたのに、また最初から教えなければという焦りもあり困惑した。
幸い後任の募集で同じような業務経験者のＨさんから引き継いでもらい、安堵したところである。ただ前任地の上司からは半分冗談と思うが、「引き抜きやがって」とも言われた。

食堂

食堂をふじしま名物の〝上鉢の肉うどん〟を中心にしたいと考え、町長と自宅に２、３回お伺いし、お願いに行ったが固辞された。首を縦に振ってもらえなかった。
それに拘(こだわ)りすぎたことから準備が遅れ、食堂チーフはじめ皆に大変な迷惑をかけた。
急きょ人脈頼りで、いろいろな施設や調理人を訪ねたり、多くの方々からご指導頂いた。
特徴あるものをと、「モロヘイヤラーメン」を取り入れたり工面してのオープンを迎えた。
「旨(うま)い」は味も当然だが、ある程度ボリュームも大事な要素と、いろいろ加減に試行を重ねた。
出来れば外廻りの営業マンを取り込めればなァとも考えたのだが……。

長沼温泉「ぽっぽの湯」奮闘記⑨
農産物直売所

民報藤島2018年04月22日第1148号

水田単作地帯の平野のど真ん中で特別、特徴も特産品もないところで、農産物直売所が果たして機能するか、不安だらけだった。

売るものや売り場、体制や規模もすべてが中途半端だったが、直売所利用組合の初代会長である深井嘉市会長の強いリーダーシップのもとで、まずまずのスタートが切れた。

長沼３大名物

長沼には昔から３大名物があり、唄にもある。

〝春孟宗、夏すもも、秋伝九郎柿〟を復活させたいと考えた。

平成８、９年のＪＡ支所長時代に、長沼管内の全戸対象に本数や坪数などを調査し、「長沼の孟宗・すもも・伝九郎柿を復活させる会」を組織、後に「長沼名物の会」とした。

それまではすべて、自給用やおすそ分け程度だったものを直売所で販売した。

すももはすでに消滅していたが、孟宗は試食会などを通して販売し、現在は学校給食用にも供給出来ている。

伝九郎柿についても、販売スタートが新聞記事になった時は、酒田・鶴岡・温海からもぜひ食べたいと往年のファンからの電話があり、届けてほしいと言われれば何回か届けることになった。

伝九郎柿は本来、「湯ざわし」が正当だが、表皮が薄くすぐフヤケ、傷みが早い。

源泉を利用して脱渋試験したり、アルコール併用を試作したりした。

今はアルコール併用方式で皮くずれしない伝九郎柿が販売されている。

食べては甘さが強く、庄内柿が白砂糖とすれば、伝九郎柿は赤砂糖かザラメ的な味だ。

知っている人でなければ当然売れず、見た目では手に取ってくれない。

（写真・「食の都庄内」ブランド戦略会議から）

（写真・荘内日報２００９（平成21）年 11月28日付）

マコモタケ

特別なものがない直売所に何かをと捜していた時、マコモタケの記事を見つけた。（つづく）

長沼温泉「ぽっぽの湯」奮闘記⑩
マコモタケ

民報藤島2018年04月29日第1149号

マコモタケは水田で稲つくりとほぼ同じに栽培でき、イネ科作物で草丈は２ｍを越える。

平成16年に長野県から２株を取り寄せ、農家２人に頼んで水田に植えてもらった。

マコモタケは、野生ではイネ科の雑草の「ガズキ」であり、塊茎で増え、昔、農家は引き抜くのに苦労した。

「田んぼにガズキを植えるバカが居る」との声があったと聞いた。

それは「野生マコモ」で、我々のは「食用マコモ」と反論したかったのだが、芳しくないスタート。併せて知名度はゼロ。「ネギ？」「カラドリ？」とか言われ簡単には売れない。

当時の役場職員のアドバイスもあり、アルケッチァーノの奥田シェフに持ち込んでご指導を頂いた。

あえて市場出荷せず直販型を選んだ。結果は需給のバランスに苦しんだ。

栽培技術の確立のため、松島や長岡で開催された〝マコモサミット〟にも会員と共に参加し研修に努めた。

徐々に面積を増やして、ぽっぽの湯直売所での販売の外、食堂でも〝マコモタケラーメン〟やマコモタケだけを使った〝マコモだけ弁当〟の開発などに努力した。

いろいろな場所で試食コーナーを設けてもらい、知名度アップに努力したが、なかなか繋がらなかった。

一方、収穫期間が９月中旬～10月下旬と短い為に、レストランでも月間メニューに組めない、スポット的な注文しか出来ないと聞いた。

冷凍や冷蔵、ボイル、乾燥と試行錯誤したが、どれも生の食感にはかなわず断念。生出荷にこだわって、現在は鶴岡市と酒田市のレストランや湯田川温泉旅館、青果店にも出荷。さらに学校給食用として、生とボイル物を納めさせて頂いている。

３年前からはアルケッチァーノ経由で東京のレストランにも週３、４回のペースで送っている。

マコモタケは特別な味はなく、何にでも合う。特に油との相性が良く､炒めやテンプラが好評だ。

食物繊維が多く、カリウム豊富な健康食材で、ぽっぽの湯食堂係長のＴさんからは、８種類のメニュー開発もして頂いており、今年の秋にはマコモだけの宴会料理として提供したいとも考えている。

長沼温泉「ぽっぽの湯」奮闘記⑪
ラジウム鉱石を大浴槽に

民報藤島2018年04月29日第1149号

月１回休館日に浴場の清掃作業を委託していたG社長から「良い石がある」と声がかかり導入することにした。

新潟の阿賀野川流域のラジウム鉱石を26個、重量にして約５００kgを大浴槽に入れた。

怪我をされても困ることから、仕切りを付けたりして工面した。

丁度その頃、台湾旅行で北投(ベイトウ)温泉に行ってきたばかりで、大いに関心があり、まろやか感が増してお客様に効果があればと念じた。

源泉の混合に工夫

大浴槽は３号源泉の単純温泉が中心である。

小さな浴槽は、２号源泉の熱い源泉と、３号源泉のぬるめのものとを混合した。

当然、外気温によって混合配分が違ってくる。

露天風呂の湯口からは、純粋な２号源泉の熱くしょっぱいものを投入し、途中から仕切を入れた、ぬるめの露天風呂も提供した。

効能が良い源泉に加えて、色々考えたつもりであった。

目安箱の設置

お客様の声を聞きたいと考え、玄関入口に郵便ポスト風に目安箱を設置した。

忌憚(きたん)のない意見を求め、即回答し、改善できるものはすぐ解決に努めた。

毎日楽しみに箱の鍵を解錠した。

おほめの言葉あり、設備や対応に不満ありで、相当数頂き、回答文は綴って公開した。

概ね好評価を頂いたものが多かったが、中には理由もなしに「支配人やめろ」との投書もあった。

何故か聞きたかったが、「間もなく定年なので、もう少し待ってほしい」と回答文に書いた。

地域に密着して

ぽっぽの湯は、旧長沼温泉から引き継いだものであり、出来るだけ伝統を継承するよう努めた。

４月例大祭、７月菖蒲湯、８月温泉盆踊り、12月湯治ゆず湯など。

地域の皆さんが参加して頂けるよう、４月創業祭、６月庄内柿オーナー募集、７月ビアパーティー、８月ゆかたdeナイト、10月新米まつり、11月収穫感謝祭、12月クリスマスプレゼント、１月屠蘇酒、甘酒サービス、３月雛祭りなど。

長沼温泉「ぽっぽの湯」奮闘記⑫
計画の倍の入浴者数に

民報藤島2018年05月20日第1151号

当初計画では年間の入浴者数を15万人として設計されていた。
旧長沼温泉は年間７万２０００人の入浴者数であり、果たして達成できるか心配した。
初年度はお陰様で４月19日開業から27万５５８１人（年間換算数29万人）となり、計画の倍の入浴者数を達成した。
そのおかげで、食堂厨房の増設や脱衣室の拡幅などを早期に着工して頂いた。
翌年の平成13年度は32万９７４７人と最高となったが、その後は年々減少。９期の決算の中では、ポンプ故障による休業などの影響で、平成16、17年は単年度赤字決算となったが、最終的には繰越剰余金を引き継ぐことができた。
泉質の良さに加え、施設の明るさと好感度、さらには社員の皆さんの一生懸命さと明るさが功を奏したものと思う。

スタート時は未知数

スタートの年にはどうなるものかと決算を心配し、総責任の支配人には給与の２万円の減額、食堂チーフには１万円の減額支給とし、年度末に目標達成時には一括払いとする約束で、とにかく厳しい状況下でのスタートであった。
社員の給与額は他からみれば低いと思いながらも、今後の状況が見えない中で我慢してもらい、業績によってカバーする約束をした。
夏期手当や年末手当などは、約束通り他より高い月数で取締役会に提案するが、出ない所もある時代でもあり、理解頂けず希望通りにはいかなかった。
社員にはすまない気持ちで一杯で、私の退職後には、基本給大幅アップ(？)の計画で引き継いだ。

長沼温泉振興会

定年を迎える直前に、温泉振興組合長Ｔさんから、組合員が高齢になり脱退したい旨の申し出があった。
２００万円減資にして資本金１８００万円にするしかないとの思いで悩んだ。
何とか長沼地区内に出資を募ってみたいと考え、要請したところ、幸い24名から５万円～25万円の賛同を頂いて、丁度２００万円の増資が実現できた。
即、長沼温泉振興会を発足させ、代表を取締役に送り経営に加わった。
今も年１回の振興会総会時には、現況報告なり、いろいろ意見を申し上げている。

長沼温泉「ぽっぽの湯」奮闘記⑬
支えてくれた諸団体

民報藤島2018年05月27日第1152号

「ぽっぽの湯」を支えてくれた諸団体
①直売所利用組合
②業者会
③湯楽会
④ふろ四季クラブ

⑤周辺開発推進委員会
⑥残りくじに福あり隊

業者会

取引(納入)業者からは、先行き心配される会社に手をあげて出店、納入頂いたことには感謝の気持ちで一杯である。

社員すべて素人集団。プロの皆さんから指導、指摘頂きたい思いで会設立を要請した。

初代会長のＩさんのもと、業者会は年２回の総会と研修会を開催し、その都度懇親の場でいろんな意見、ご指導を頂いた。

研修会には会員の中から講師として講演頂き、講師料を格安にして懇親会は盛り上がった。

更には、創業祭やビアパーティの景品の提供も頂き感謝申し上げたい。

湯楽会とふろ四季クラブ、周辺開発推進委員会

湯楽会は特に常連の皆さんの集まりである。

例会を開いて懇談し、その場でもいろいろな意見を頂き参考にさせて頂いた。

ふろ四季クラブは、県全体の組織で故・佐藤武夫さん（同級生・三川）が主宰し、オープン前にも積極的に提案などを頂いた。

日本温泉協会主催の研修会にも共に参加し、お陰様で温泉管理士第６１６号を取得でき、後の施設管理や経営管理に大いに役立った。

そんなことから、日本温泉協会幹部・県温泉協会Ｙ専務理事にも何度となくお出で頂きアドバイスを頂いた。

マスコミにも太いパイプがあり、大いに宣伝してもらいスタートの好成績に繋がったと思う。

周辺開発推進委員会には、お友達感覚で勝手にいろいろお願いし、周辺整備や管理をして頂いたり、苦しかった頃の励ましやお手伝いを頂いた。

残りくじに福あり隊

宝くじ販売を始めたが、完売しない時もあり、これが一苦労。少しづつの残りを買い上げて頂く組織として「残りくじに福あり隊」と名付けて10名でスタートし、現在８名。これもお友達感覚でお願いした方々である。

１回だけ大金(？)当選で分配金が出た。

トータルでみると大きな迷惑をかけていることになるのだがー。

長沼温泉「ぽっぽの湯」奮闘記⑭
断念したこと

民報藤島2018年06月03日第1153号

ガラスハウスの誘致を断念

花卉栽培４棟のガラスハウス建設補助事業の話があった。

出来れば、ぽっぽの湯周辺に誘致したいと考えた。

実現出来れば相乗効果大と期待し、役場で開かれた説明会議にも出席した。

新たに井戸を掘らなくても、当社の３号源泉（32℃）を使えば経費節減にもつながると話したが、使用する水の成分で、確か塩基度(？)と記憶しているが、使用する条件が70ｐｐｍ以下が望ましいと説明された。

３号源泉は69ＰＰｍであったが、後々責任問題にもなると思い、即、誘致を断念することを伝え、その場で降りることにした。

ぽっぽの湯から見た月山

同、鳥海山

他に断念したこと。

(１)グランドゴルフ場　近隣農地を借りてハーフのＧＧ場を整備し、グランドゴルフした後の入浴、そして会食パターンを考え計画したが断念。

(２)貸農園

近隣農地をを借りて区画をつくり、２年続けて何名かの希望者がいたが、皆、雑草に負けて断念。

(３)住宅団地

彦九郎堰沿いに温泉付きの住宅団地を考えた。

鳥海山と月山双方が眺望でき、全国で唯一２つの百名山を見ることが出来る素晴らしい立地条件。しかも平屋に限定し計画したが、２号源泉の湯量不足で断念した。

(４)移動式ログハウス

宿泊施設の要望があり、その対策として、近くの厚生館には邪魔にならない程度にと、駐車場中央の道路端に鳥海山、月山が眺められる場所があり、そこに移動式のログハウス設置を考えた。

しかも焼肉パーティも出来たら最高との思いだった。

経費は２５０万円程度であり、元は取れると判断したのだが、理解が得られなかった。

長沼温泉「ぽっぽの湯」奮闘記⑮　最終回

民報藤島2018年06月10日第1154号

定年退職

規則により60歳定年、誕生月の月末とあったが、社長から「年度を全うすべき」と言われ、誕生日の年度末とすることで10ヶ月延長された。規則も「月末」を「年度末」に文字訂正のみであった。

退職時点でも、何らかの形で関与する立場をとお話頂いたが、残ることで中途半端な立場や、後任者がやりづらい事を考えると、すべて辞すべきと判断した。10ヶ月余計在籍したことで、後任者にも十分引継ぎ出来たし、口は出さないが、聞かれれば仔細答えるとの約束で身を引くことにした。その方が新しい発想も生まれるし、いろいろ考えることが出来ると判断した。

終わりに

初代社長である小鷹栄一町長、阿部昇司町長、合併により鶴岡市の芳賀肇助役、佐藤智志副市長と４名の社長に仕えた。共に親切丁寧なご指導を頂き、職務を全うすることができた。

当初の取締役は、社長（町長)、農協組合長、商工会長、温泉振興組合長、役場担当課長と私の６名であった。

こんなことを書くとお叱りを受けそうだが、私の他はすべて充て職。故にいろいろ新しい提案もするが、「今良ければ」と却下されることが多かった。

第３セクターとして、他の同業者（販売、飲食も含め）に配慮しながら、営利目的ではなく、儲けないで、しかも赤字は出さないようにとのことで、大変難しい経営課題で、３セク故の悩みであった。

当時、「大人しくＪＡ職を全うしていれば良かったのに」とよく言われた。

何よりも農協職員として能力の限界を感じていたし、確かに収入も年金も大幅に違ったのは事実であるが、まったく悔いはない。

むしろ、こんな素晴らしい体験や経験をさせて頂いたことに感謝のみである。

ＪＡ時代も含め、特に長沼地域の皆さんからは格別なご協力や、支えて頂いたことに本当に感謝申し上げます。

そして、今回の「民報藤島」の紙面を借りて、断片的で順不同であったが、私なりの「奮闘記」(？)をまとめることができました。

この「民報藤島」が、加藤編集長のもとで、更なる身近な地域情報誌として発展されることをご祈念申し上げます。(完)